正宗白鳥

太宰治小論

太宰治小論

かつて、太宰治の短篇「おさん」「桜桃」「ヴィヨンの妻」などを読んで、興味を覚えたことがあった。女をよく知っているらしくも思われた。そして、この、私などには縁の遠いらしいこの作家のものを、もっと読んでみようかと思っていたのであったが、ふと、彼が変な死に方をして、世を騒がせ、その作品もひどく持囃(もてはや)されるようになったので、こういう時に、世評に雷同して、あわただしく読んで批判を下すよりも、少し間を置いて、

冷静に読んで、周囲の声に心を乱されないで、自分一箇の鑑賞を試みようと志した。この作家は年月を経ても作品価値を低下されることはあるまいと、私は信じていた。

そう思い思い今まで新たに彼の作品を読む機会はなかったのであったが、今度この雑誌の編集者から、「太宰に関する何かの感想を」と依頼されたので、かつての意図を思出して、その依頼を安受合いに受合った。昨今頭脳疲労している場合、可成(かなり)多量な彼の作品集を見ると、圧迫感が起って、読むことも批評することも躊躇されたが、依頼者の熱望を拒絶しかねて、渋々読んで見ること

にした。汽車のなかで読み、芝居の幕間に読み、注文した料理の運ばれる間に読んだ。

読めば、詰らぬ者にでも、下手な作品にでも、それをそれと認めながら興味を感ずる私である。

太宰の作品には、かつて予期していたほどの妙味は感ぜられなかった。

小説には人間が人間を書いているのだから、同じ人間の一人である私は、読みながら共鳴を感ずるところが少からずある筈で、太宰の作品にも私自身の影のちらつくのを見ることはある。しかし、私が彼の作品に引摺られ

るところは案外少かった。私を天上に引上げるところも奈落に引落すところもなかった。無論私を陶酔させるところも、戦慄させるところもなかった。

「ヴィヨンの妻」のなかに、「人間の一生は地獄でございまして、寸善尺魔とは、まったく本当のことでございますね。一寸の仕合せには一尺の魔物が必ずくっついてまいります。人間三百六十五日、何の心配も無い日が、一日、いや半日あったら、それは仕合せな人間です」と、作者の影とも覚しき人間が云っている。私は同感である。しかし、この気持が、痛烈な真実性を持って、読者たる

私達の胸を抉る如くに書けてはいないのだ。私自身がその気持を持っていながら、そして作者冥利それを心行くまで文字で表現しようと志しながら為し得ない如く、太宰とても為し遂げてはいないのである。「ヴィヨンの妻」も、空々(そらぞら)しい。

私は太宰の作品は、今のところ、幾つも読んでいないのだが、読んだ範囲では、「人間失格」と、「グッドバイ」とがいい、評判の「斜陽」は形のだけのもので、斜陽の斜陽たる光景も人間心境も、鮮明に現わされていない。鋭利な批判は無論欠けているが、淡々たる絵模様に

も出ていない。斜陽を詠歎している詩の趣きもない。異様な自殺までした作家でありながら、この作家の作品には詩が無いのである。人としての行動にも、片々たる感想録にも、詩人らしいところがありそうに思われるに関わらず、その小説には詩が乏しいのである。

小説には必しも詩が無ければならぬと云う事はない。ぎりぎりの真実の人生を克明に描写し表現したものも面白いのであるが、詩がありそうな作柄（さくがら）でありながら詩のないのは甚だ物足りない。「斜陽」「ヴィヨンの妻」などその一例である。

「僕はね、キザのようですけど、死にたくて仕様がないんです。生れた時から、死ぬ事ばかり考えていたんだ。皆のためにも、死んだほうがいいんです。それはもう、たしかなんだ。それでいて、なかなか死ねない。へんな、こわい神様みたいなものが、僕の死ぬのを引きとめるのです」と、「ヴィヨンの妻」のなかに云っている。最後に自殺を決行したこの作者にはこういう心理が不断存在していたのかも知れないが、その心理が、作品のうちにおのずから流れてはいないのだ。波打ってはいないのだ。その心理を露骨に公言しないでも、その気持は、作中に、

自分或は他人を描いているうちに、おのずから現われて、読者をして、その気持に魅惑させるものがあってこそ、至上の作者と云うべきである。死に対するアコガレも取って附けたようで、私などをして、身にしみじみと感ぜさせ、読みながら、或は読み終って、詠歎これを久しゅうすと云う趣きがない。

「グッドバイ」には、雑駁な世相の一片を、何となしに書いているうちに、「この世いとわし」の感じが、おのずから出ているのが面白い。「乱雑。悪臭。ただ荒涼」居たたまれなくって、早くそこを脱出せんとする気持が、

読みながら私の気持にも起るのである。この最後の未完の作品の巻頭言として、作者自身、唐詩選の五言絶句のうちの「人生足別離」の一句を引用している。この句は、日本訳すると、「サヨナラだけが人生だ」ということなのだと、作者はその意味を受入れている。唐人の詩句によって、作者自身の心を詩に化しているのである。「まことに、相逢った時のよろこびは、つかのまに消えるけれども、別離の傷心は深く、私たちは常に惜別の情の中に生きているといっても過言ではあるまい」と、作者が註釈を加えているところは、作者の詩のあらわれが見ら

れると云ってもよかろうか。

「人間失格」には、人間に対する恐怖心が出ているのが、私には面白かった。私の心にもそういう恐怖心の潜在しているのに気づいて、理窟なしに共鳴を覚えた。この作中の主人物は、幼少の時から人に媚び人の歓心を得るため、道化た真似をしたりするのが、天性の恐怖心に基くのである。私は幼少の頃そういう態度は執らないで、むしろ、反抗的態度を持していたのであったが、その反抗的態度の底には人間恐怖が渦巻いていたと云ってもいい。人に突っかかる態度も、道化た真似して媚びるのも、

恐怖心の現われが、唯形を異にしているに止まるのである。「人間失格」の主人公は、成長して後、酒、煙草、淫売婦などに溺れるのも、必竟、人間恐怖を、たとい一時でも、まぎらす事の出来る手段である事を、自分に認めるようになっている。それどころか、共産党員になって捕えられ、たとい、終身刑務所で暮すようになったとしても、平気であったのは、世の中の人間の食生活というものを恐怖しながら、毎夜の不眠の地獄で呻いているよりは、いっそ牢屋のほうが、楽かも知れないとさえ考えるようになったというのである。恐怖性の起す人間心

理の変態である。作者はこれを「人間失格」の例とするのであるが、人間は或一面からいうものなので、それは人間失格ではなく、本格の一面かも知れない。

「私は死にます。こんどは犬か猫になって生れて来ます」

突詰めてこんな遺言を製作したりするが、犬猫だって恐怖心を具えて動いているのではないか。

意外に思ったのは、この作者の感想断片のうちに、「内村鑑三の随筆集だけは、一週間くらい私の枕許から消えずにいた。私はその随筆集から二三の言葉を引用しよう

と思ったが、だめであった。全部を引用しなければいけないような気がするのだ。これは（自然）と同じように、おそろしい本である」と云っている事である。この本に引きずられたと告白し、内村鑑三の信仰の書にまいってしまったと云っている。太宰の恐怖心は、留まるところを知らず、ダンテの地獄篇を一日に一曲ずつ読み、三十三夜眠れなかったという内村の恐怖心に感染して、趣きのちがった恐れ心を起したのか。これは人間失格か、人間本格か。

彼は志賀直哉に対して我無者羅（がむしゃら）に毒舌を弄している。

狂犬の如く噛みついている。川端康成に対しても悪声を放っている。自分の作品を非難されたことが原因であるのである。これも恐怖心の変態的あらわれではあるまいか。内村の信仰に恐れ入った彼が、志賀に対する世間の讃辞である崇高とか、節操とか、潔癖とかを嘲っているのは、矛盾しているようであるが、これは太宰の人間失格がまだ徹底せず、崇高節操潔癖などにまだ未練を残しているためである。内村の信仰も、志賀の崇高も、人間失格者の目にはどうでもいいので、恐れ入る気にも嘲る気にもなれない訳である。

彼は、志賀の幸福らしい生活振りを羨み、自分は、血を吐きながらも、本流の小説を書こうと努め、その努力は却ってみんなに嫌われ、三人の虚弱な幼児をかかえ、夫婦は心から笑い合ったことがなく、障子の骨も、襖のシンも破れ果てている五十円の貸家に住み、戦災を二度も受けたおかげで、もともといい着物を着たい男が短か過ぎるズボンに下駄ばきの姿で、子供の世話で一杯の女房の代りに、おかずの買物に出るのであると歎息している。これはただの咀いの声ではなく、真心からほと走る声である。太宰の全作品解釈にも役立つ言葉である。「本

流の小説」に努力しているのが、つまりは彼の本心であったのか。本流だの、本流外れだのは、世評で勝手に云われるところで、人間失格者が自分でそんな事は抱泥しなくてもいい訳である。

かつて青野季吉の話で伝え聞いたのだが、或座談会の席で、太宰は私の作品を批評して、一介のジャーナリストたるに留まるのではないかと、一言ではねつけたそうである。ところで私はその批評を甘受するのである。私は若き頃、ジャーナリストで一生終始してもいいと思っていた。「本流の小説」については、私は不断論評はし

ているが、自分自身は、「本流の小説」なんかを、死に身になって書かねばならぬと思ってはいない。元来本流の小説家として、失格するもしないも、そんな事どうでもいいではないか。

日本文学電子図書館

太宰治小論

著　者：正宗白鳥
制作者：宮澤一郎
底　本：「白鳥全集」第６巻、新潮社
昭和40年８月25日 発 行
昭和51年８月30日 セット版

日本文学電子図書館